〈史学科四〇周年を祝う会　記念講演〉

回想の史学科

小倉芳彦

この百周年記念会館正堂は大学の入学式・卒業式で着飾った子女を前に私が「告辞」を行なう場所で、そこでは、型どおりに、時には型を破った話をするのが主でした。数えてみればそれを十数回重ねて参りました。そのたびにモーニングを着て、「君が代」と共に式を挙げるというのが私にとってのこの場所でした。しかしながら、今日は色とりどり、というより、年さまざまな方がいらっしゃいまして、いったいどの辺りに、焦点を当てたものか非常に迷っています。史学科設立から四〇年になるということで、去年の秋くらいから何か企画が動いていることは知らされていました。そして、四月に入って、史学科の代表の方がみえて記念講演をやってくれというお話があり、断れる筋ではないんですけども、「まあ、私がやれば漫談ですよ。漫談でいいんですか」って言ったら、「いや、漫談半分に学術半分」と言うので、ともかくお受けしたのですが、この場には学術派の方もいらっしゃるし、漫談派の方もいらっしゃる。その両方を合わせて二つともご満足いただけるかどうか大変心もとない次第です。

実はきのう、珍しく校務から解放されて一日在宅していたら、記念講演会の進行予定がだんだん分かって参りまして、来賓として院長先生がお見えになるという情報が入り、「これは漫談というわけにはいかないな」と、昨日になりまして、急遽少し話の組み替えをいたしました。ところで、おととい、卒業生名簿が入荷してすぐに私の所へ届けられました。一昨年の大学開学五〇周年の記念講演の時にも申したのですが、パラッと見ますとすぐ誤植が見つかる。私が誤植を見つけるのではなくて、誤植が私を呼んでくるわけです。「間違ってますよ」と向こうが声をかけてくるようになっている。名簿の正誤表が入っていますが、その大部分は私が五分間のうちに早速発見したものです。誤植と言うよりも、編集の方の誤解もあるようなのですが。

史学科では創設以来、専任の先生方がこれまでに新旧あわせて二〇名おられました。現在の定員は九名なのですが、兼任をお願いした方が六名、他に助手が一三名、嘱託としてお願いした方が三五名、副手として二五名、それに加えて非常勤講師一八〇名もの多く

の方々のご協力によって史学科が運営されてきたということ、この皆様方のご協力によって研究室が成り立ってきたということをひしひしと、今、感じております。そのことをまずお礼申し上げてから思いましたら、最初に学科主任の井上さんが全部今のことをおっしゃいました。必要なくなりましたけども、繰り返してやはり私としてお礼を申し上げたい。その中のかつて専任教員の一人であった者として、感銘を深くしている次第です。ただなによりも、そういうスタッフ、非常勤講師の方々を含めたスタッフ以外に、とにかく学部の卒業生が二七五〇名、大学院の在籍者が四八四名、この方々なしには、「なしには」と何回も言いますけれど、なしには史学科は成り立たなかったわけです。先生方がいくら壇上で踊ってみせてもどうにもならんのでありまして、今日、お集まりになったその二千数百名中の選りすぐられた方々に、心から深く感謝を申しあげる次第であります。

一

今日のお話は大きく言いまして二つに分けようと思います。最初は史学科誕生について。それから漫談を入れまして、最後に学術らしいことをちょっとやります。

史学科誕生のことを言おうかと考えた時に、史学科誕生以前を話すのがいいと考えました。やはり、「時」と「人」と「所」、この三つが揃いませんと何事も成り立たない。この辺のことはあとでお見えになる予定の児玉幸多先生こそが、まさに生き証人でして、私ごときが申すのは控えなくてはならないのですが。

まず最初に、「時」ですが、これは先ほど院長も井上先生もおっしゃっていました。一九六一年でありますけど、その前史がありまして、新制大学として学習院大学が発足したときには文政学部と理学部の二学部だけで、文政学部には政治学科と哲学科と文学科がありました。その中で哲学科は我が学習院大学においては、安倍院長先生ご自身が哲学者であるし、哲学関係の先生方が綺羅星のごとくお揃いになっておられる。文学科の方の中心は国文学でして、戦前の学習院高等科の文科・理科の伝統を受け継いで、文科の優れた先生方がおられ、それに、外国文学専攻もありました。一九五七年（昭和三二年）に国文、英文、独文、仏文の各専攻が学科として独立した。ですからその時点で文学部としてありましたのは、哲学科と国文学科と英文学科、独文学科、仏文学科で、史学科は影も形もございませんでした。

それでどうして史学科ができなかったのかということについては、諸説あるのですが、一つは新制大学になった時に、歴史関係の史学科というのはその筋に少し遠慮した気味がある。「その筋」というのはむろんかつての軍部ではなく、占領軍当局というのがありまして、その辺への配慮があったとおっしゃる方もおります。或いはどこかに記録があるかも知れません。教科書墨塗りの直後でございますし、やはり敗戦直後の日本で史学科を看板に掲げることには一種の遠慮があったらしい。

しかしそれは一つの要因で、もう一つはやはり財政難。あとで申しますけども、当時の学習院はそれまでの宮内省から離れて、私立の学園として自立する、自分で資金を調達するということで、非常

に苦しんでおりましたので、とても贅沢は言えない、とても新学科をつくるまではいけなかった。その代わりというのか、その準備というのか、東洋文化研究所というのを設立しようという動きがありまして、ちょうど後に史学科の教授になられる末松保和教授が図書館長になっておられまして、まあ学科は無理だけどもまず研究所をつくり、研究所でアジア諸国の文化を研究しようという、「近きより遠くに及ぼす」、つまり朝鮮から始めよう、そういうことで東洋文化研究所が設立された。それがやがては学科になれるかなあという雰囲気があったと聞いたこともあります。まあそういうような状況で、大学が開設されて一〇年間は史学科は影も形もなかったわけです。さらに「時」ということでついでに申しますと、昭和三〇年代――一九五〇年代の後半から六〇年代に入って、いわゆる第一次の歴史書ブームというのが起こりまして、「日本の歴史」、「世界の歴史」というシリーズものが爆発的に売れる、著者はそれで家が建つという、そういうことがあったくらいで、それが一つの上げ潮になったというのが第一の「時」の問題です。

第二の「人」ですけども、昭和三〇年代の初期、一九五七年から五九年までの文学部長は富永惣一先生でした。富永惣一さんというのは西洋美術史としては旧学習院以来の超一流の方でありまして、その方が文学部長でした。ところが昭和三四年の四月から新しくできた国立西洋美術館の館長に転出されまして、これが決定的でございます。それまでは富永文学部長のもとで、富永さんを中心にした新学科構想がなかったとは言えないんです。美術史というのか、或いは文化史というのか、そういうのに基点をおいた学科が考えられなかったはずはない。それが一九五九年の時に消えた。

その後を受けて文学部長になられたのは近代文学の麻生磯次先生でございまして、東大から定年で学習院に来られて間もなくでした。麻生さんの文学部長時代は五九年から六三年の四年間で、その麻生さんがこういうことをおっしゃった。「学習院大学には哲学科と国文学科、それに英独仏の学科があるけれども、史というのがないね。哲・史・文と揃うのがこれがまあ普通だ。史がないのはどうも常識的でない」というようなことをおっしゃったと聞いております。

それでその史学科を作るについてはそのための人材が学内にいる。まず当時政経学部に属しておられた児玉幸多先生、それから図書館長の末松先生。このお二人は日本史、朝鮮史の正に権威であります。あと高等科に金沢先生、それから私、小倉がいる。それにもう少々加わっていただいたならば、学科として体を成すはずだ。つまり新たな補充は一名ないし二名で済む。こういう学科・学部の創設のためには厳しい条件がございます。私も現在そのために苦しんでおりますけども、なにせ教員を増やすというのは大変なことでございます。それでその既存の四人と、それから補充を少々すれば間に合うし、入学定員三〇名ということで行けばこれで充分採算が成り立つ。それと先ほど申しました、ちょうど三〇年代の歴史書ブーム、これが上げ潮になりましたから、歴史の学科ならこれは需要があるだろう。現にありまして、文学部に進学しようとする人でも、史学科があれば史学科に入りたいという人が何学年もいたんですが、そういう方は涙を呑んで他学科で我慢した。そういう人を私は

何人も知っていますけども、ちょうど一九六一年に史学科ができますと、堰を切ったようにどっと（男子高等科からは一人か二人だったんですけども）、女子高等科からは才媛が進学して参られました。そういうことで、まさにそれは「人」の問題で、そういうことを見逃すわけにはいかない。

第三は「所」ですが、先ほどすでに触れましたけども、「所」つまり大学の研究室は大変惨めな状態であったのです。西三号館と呼ばれていた研究室――実は今年に入ってからついに取り壊してしまいました。学生の部室棟の黎明会館の奥に「富士見会館」という名前をつけた学生の集会場を造りました。富士見会館という名を付けた理由は、あそこにむかし江戸時代に富士見茶屋があったからで、本当に富士が見えている江戸の絵図がありますけれども、今あそこで富士が見えるのは屋上に移した弓道場だろうと思います。それを建てた際に、その南側にありました西三号館、あなた方も演習室なんかでかなり使ったと思いますけども、西三号館は取り壊しました。その代わりになる新教室棟の建築に最近入ったところであります。その西三号館が理学部を除く大学全体の研究室でした。

そのかつての西三号館の建築の苦労は話すも涙なのですが、実はお金がないので西落合の現在は「日立クラブ」となっている、皇族のための立派な昭和寮という建物を日立に売りまして、そのお金で西三号館をやっと建てた。たしか一階が政経学部、二階が国文学科と外国文学科の研究室、三階に哲学科ともう一つ人文研究室というのがありました。で、人文研究室とは何ぞやということなのですが、これが先ほど言いました美術史の富永先生が総帥格でありまして、それに教育学の林先生、中国文学の沢口先生、それから末松先生、図書館長ですけども研究室をその西三号館の三階にお持ちで、それに私も哲学科の講義を手伝っていたものですからそこに机を一つもらいまして、さらに金沢先生がおられました。今言ったような面々で、人文研究室、つまり言ってみれば、専門学科に属さない教科を担当している教員たち、これの寄り合い所帯と言いましょうか、これに人文研究室という名前を付けておりました。

その状態であったのですが、あまりにそれでは貧弱だと言うので、八五周年記念の時、これは前川国男さんの設計に成るところの、ピラミッド教室を中心とし、それを取り囲む建物群――東側に本部、北側に北一号館、南側に南二号館というのができました。その北一号館を研究室にしようということになった訳です。二階には政経学部が、三階に仏文・独文・英文、それから四階の国文と哲学との間に人文研究室が入った。ところが人文研究室という名前では内容がはっきりしてないというので、「総合研究室」と名前をそのころ変えていたんですが、その総合研究室を新設の史学科に明け渡すことになった。一九六〇年にできた建物の総合研究室の場所を、六一年四月から史学科が頂くことになりました。まあ明け渡しですね。これもちょっと裏話的になりますが、私が史学科に変った部屋に入って、ひょいっと掲示版を裏返して見ますと、裏側に「〇〇くたばれ」と旧研究室の方の名が落書きしてある。そういう怨念があるのだと感じました。「所」はそういう由来で、史学科は最初誕生したということです。これはやはり私には忘れられません。

当時心理学科はまだ姿も見せておりませんでした。哲学科の中に

心理学専攻の学生がいるというような状態で独立はしておりませんでした。

そういう状態で出発しましたので、初期の嘱託の方は、卒業生名簿の最初の三ページに「嘱託」欄がございますが、ご覧になると南部さん、池田さん、町並さん、坂本さん、坂本さんの「阪」は誤植です。土偏です。伊藤さん、大鳥さん、ここまではその年度の国文学科卒業と書いてあります。国文学科からの輸入というか手助けというか、史学科のために働いてくださった方々でありまして、昭和四〇年（一九六五年）に第一回の卒業生が出ましてから、史学科卒の嘱託が中村貞子さんと野中和子さん。これが史学科卒としての嘱託の第一号でございました。それから助手はと言うと、助手も最初おりませんで、北海道大学を卒業した鈴木英雄さんという方を安田さんが斡旋されまして、初代の助手として勤められました。その後学習院史学科に大学院ができまして、前期第一回の修了生は四二年（一九六七年）、その中の善積（松尾）さんが、最初の助手になられた。これがそもそもの最初の出発点でございます。

二

そこで漫談に入りたい。今のような由来で史学科になったわけですが、実は「史学科」というのは少し訛っているのではないか、「酒学科」ではないかという説が自他共にありまして、その「酒学科」の「酒徒列傳」というのを少しお話ししたいと思います。これは少々お耳に触ることがあるかも知れませんが、ここは記念の会ということでお許し頂きたい。

児玉先生は「酒は辞せず」、断ったのを拝見したことがございません。一九一〇年生まれでございますから、現在満九一歳。今日もきっと辞さないだろうと（思います）。ご承知のように博覧強記を正に地でいった方でございまして、即断力・管理能力は人並みはずれた方で、女子短大の学長に選ばれ、さらに大学長になられ、その後、江戸東京博物館の館長になられ、またその後現在もまだご活躍中であることはご承知の通りであります。

末松先生。末松先生と酒とは縁がないだろうとみなさんはお思いでしょうが、確かにそうお好きではない。まさに謹厳なる実証史家でありまして、東洋文化研究所の主事。以前の東洋文化研究所の所長は安倍能成院長が兼ねておりまして、所長の下で主事として実務をなさっていたのが末松先生ですが、そのお仕事の中心の一つは『李朝実録』の復刻版を出す。これをとにかく昭和二八年から始められた。第一冊が出た時には、これは未来半永久的な事業であろうと言われていたんですけども、その後色々な事情が好転しまして、印刷事情なんかもよくなって、全五四冊ですでに末松先生の在職中に刊了しておりました。そういう先生ですから、酒席などをお断りになるかというとそうでもない。ただ初めに例外がございまして、これは史学科一期生の時の逸話です。史学科では今は年度の初め五月くらいに、一泊の研修旅行を（なるべく温泉のあるところを選んで）行なっているようですけども、昔の一期生の頃はそんな贅沢はできませんで、ささやかに一日遠足をやっておりました。第一回の遠足は川越市に行きまして、喜多院に行って、それでお昼は吉見の百穴の野外で、というつつましさ。いい天気でして、陽に照らされ

て、あのころは紫外線なんて恐れていませんでしたから、まあ大いに楽しんで帰ってきた。山手線で別れるんですけども、渋谷まで行ってお茶を飲みましょうということで、渋谷の喫茶店で確か一〇人くらいかでお茶を飲んだ。普通はそれで終わりなのですが、そこに一枚役者がおりまして、次に申しあげる金沢誠、愛称マコちゃんですが、「ちょっとやりませんか?」これが曲者です。「ちょっとやりませんか」と言われてですね、「いや、今日は」と絶対言えません、これは。「今日は飲もう」なんて、野暮なことは言いません。「ちょっとやりませんか」とおっしゃる。

その時も「ちょっとやりませんか」ということで、男子学生数人と私も同道しまして、先生お通いの新宿のある二階のバー、名前は今秘しておきますけども、行きました。それで、にぎやかに騒いで、その日はそれで解散したのですけども、翌日末松先生が研究室に見えまして、「金沢さん、ああいう若い学生を…」、何と言ったかな?「誘惑してはいけない」と言ったかな、「堕落させてはいけない」と言ったか、その先は末松先生の剣幕に私は恐れて、「私も一緒だった」と言いそびれました。だから私も怒られるはずなのですけども、怒られ役は金沢先生一人引き受けまして、ああいう地方から出てきた純真な学生——だいたい誰だか見当がつくと思うんですけども——それを連れて歩くというのはよくない、とお叱りになられた。なぜそれがバレたかというと、連れて行かれた学生が大変感激しまして、「あんな楽しい晩はなかった。バーというところでお酒を飲んで騒げた」ということを、ちょうど偶然電車の中で隣合わせた末松先生に嬉々として話したんですね。末松先生どういう顔で聞いておられたか、で慍りを抑えかねて「金沢さん!」とこう来たのだろうと思います。そういうことがありました。その事を私はどこかに書いたと思いますが、金沢先生はその場ですぐ「すみません」とあやまって、それ以来「末松先生は史学科の道徳係」ということを折に触れておっしゃった。このユーモア、これはなかなかものでして、下手したら飲酒派と酒学派とに史学科は二分されるところですが、そこを「すみません」、「末松先生は道徳係」ということで見事に初期の難関を突破した。これはまさに天稟の才だった。「私も行きました」と手を挙げたらよかったのですが、やはりそれを申さずに私が叱られなかったのは、今でも残念に思っています。

ところがその末松先生も、そのうちにはだんだん柔らかくなられて、コンパの後で、あの頃はサロンと言ってたんでしょうかね、後家サロンなんていうのがありましたから、まあダンスをしたりするサロン、そこへ行って確か一期生か二期生だと思いますけども、「先生踊りましょう」、とうとう引っぱり出されて、ドタドタとダンスをなさるまでに「成長」されました。そういう「成長」でいうと、今お見えになった、清永先生もお酒にはあまり縁がなかったんですが、だんだん訓練されまして、お酒と同時によくお眠りになるようになられた。

金沢先生の話が先に出ましたけども、金沢先生は非常に豊富な経歴の方でありまして、私が学生だった頃には西洋史学科の助手でした。戦中です。火の気のない小使室で、二人で新聞紙をひねって燃やしては、暖を取ったというような、そういう仲を何の仲と言うのか知りませんが、それから始まりまして、金沢先生はその後、回教

圏攷究所というところにしばらく籍を置かれ、そこで大川周明、竹内好といった人たちと出会っていたと思います。その辺での体験があります。戦後に攷究所が潰れてからは、ご親戚の関係でしょうかスタイル社の編集の仕事をされた。その時期の話をやり出すと、宇野千代さんの原稿取りに行かされた話ですとか、キリがないからまあやめましょう。

そういうところから学習院に見えたわけでありまして、生まれと育ちは下町の根津桜木町。それに加えてフランス史、思想、或いはフランス文学を通じてのフランス・モラリストというのでしょうか、人間を外面で判断しない、地位・身分の外側では判断しない、辛辣な反面、また優しく人間を見透す目を持っておられました。フランス革命の講義は名講義。「そこでいちゃついてる二人、話やめろ！」と叱ると、たちまちにもとの講義に戻るという、大変な話術の持ち主でございます。史学科ができる以前は政経学部のホームルームを担当して、先生は本当にホームルームの学生とよく付き合われました。それこそ「ちょっと行きましょう」という訳で、さんざあちこち連れて飲ませる。そういう人たちが最近でもまだ必ず先生のことを慕っています。

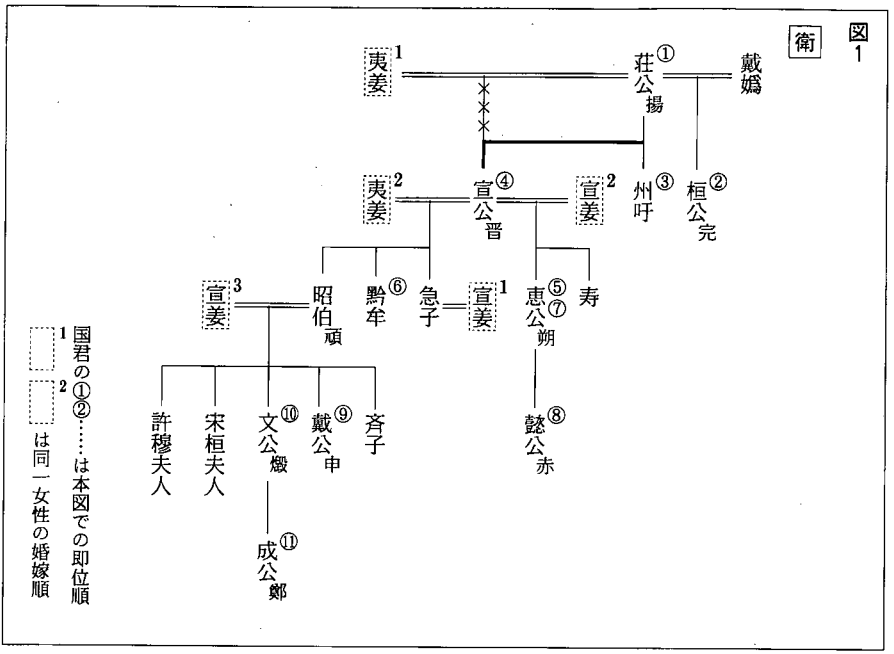
安田先生が最後になったのは申し訳ないのですが、武家の棟梁という感じがいたしました。実際、陸軍少尉で「ポツダム中尉」になったと思いますが、乗ってた馬は重くて大変だっただろうと噂してました。先生の軍人としての指導力、それが研究者としてもう一回学問の世界に戻ってきてから、「やったるぞ」という決意のもとで、全身全力で学問に専念されまして、特に史学科に一九六三年に見えてからは、「学習院の史学科を日本一にしてみせる」とおっしゃっていました。そういう形で沢山の俊秀を育てられたという事でございます。この次に言うのは誉め言葉になるのか、「但し」というのか分かりませんが、大変な合理主義者でありまして、お酒は梯子です。これは一晩に三軒四軒は必ずぐるぐる回って、その度ごとにホステスへのおみやげを持ちながら回るのですけども、翌朝は必ず、昨夜の分を割り勘で徴収されます。よく金沢さんと（私と）の三人でいたのですが、八割は安田さんが楽しんだ。八割が安田さんで私達は一割一割くらいなのに、割り勘で三分の一を徴収されます。

三

最後にやや学術的なお話をいたします。お手元の史学科四〇周年を祝う会プログラムに挟み込んだ資料類について、ちょっと説明させていただきます。

私自身は先ほどのような大酒徒がたの中にあって、ウロウロしておりまして、結局その間、文学部長を二回計六年、女子短大の学長六年、それから今の大学長を五年と六ヶ月少々ということで、結局通算一八年間史学科に専念してなかったということ、四〇年のうち一八年間は「半不在」というような状態であったことを申し訳なく思っております。その間私なりに学生諸君と付き合ってきたわけですけども、初期の頃は私もまだ研究者として頑張ろうと思っておりまして、学生諸君がライバルでありました。すぐれた卒論などを読みますと、妬ましくなるくらい。中期になりますと、学生諸君とは

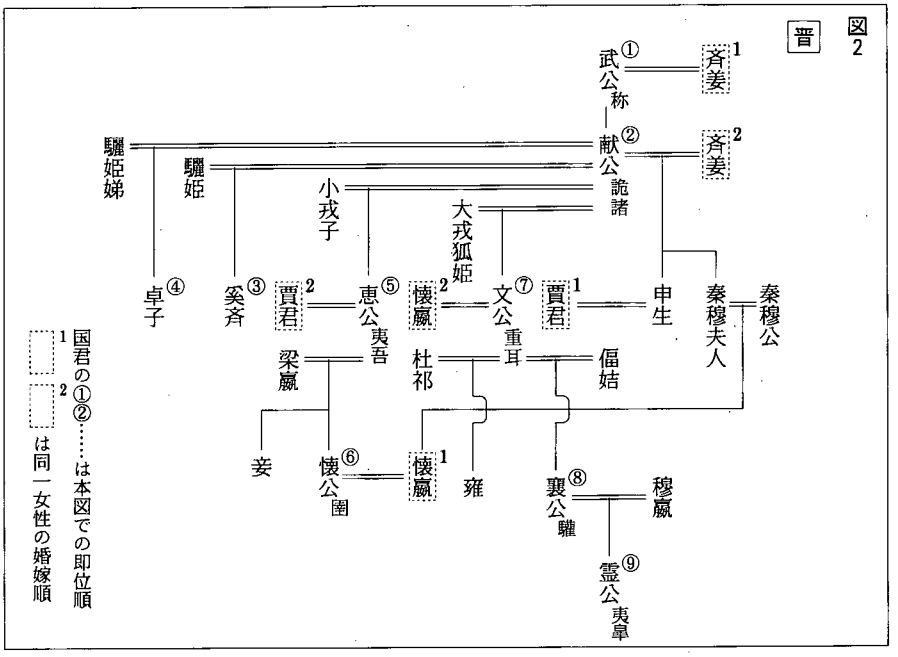
図1



研究者仲間だというような気持になりました。ちょうどその頃、史学科と史学会との関係はどうなんだとかいう問題が提起されたりして、だいぶいろいろ議論した覚えがあります。その時にはかの愛すべき先輩の金沢先生とは意見が食い違いました。金沢先生は断固として私の考えを認めない。私は金沢先生はどうかしている、というように、旅先でも議論を果てしなくやりました。それから、晩年といいますか、いろんな学長やらをやった時代になりますと、これは半分もう学生たちの祖父に近くなって参りまして、訓読伝授、私はこういう風に訓読で読んできた、その訓読は決して満足するようなものではないけれど、少なくとも日本の伝統的文化としてはこんなふうに読んできたんだから、変な読み方はしない方がいいよ、ということが中心になる、極めてウォームハートで好々爺。

そんな状態なものですから新しい研究分野を拓くという余裕は全くなくて、結局一〇年くらい前に完成した『春秋左氏伝』の岩波文庫の翻訳のリペア、或いはアフターケアをやるしかない。実は今日配布された『歴史遊学』の中に書いたものもその一例になるんです。図1、これは衛という国の系図で、その上の方に衛の国君の即位順で、①荘公、②桓公、③州吁、④宣公、この宣公の上の所の線を×××と直してありますけども、このことに関係して、ある読者――北上市の岩田さんという方なのですけども、この方から質問がありました。宣公（晋）というのは、荘公と夷姜の間に生まれた子供というふうになっているけれども、その宣公がまた夷姜――点線で囲った2ですね。2とあるのは当時の女性は一族の間で、俗に言う盥回しがあった。族を単位にした婚姻ということがあったんです

図2



けれども、夷姜はかつて荘公の妾だったが、また宣公の妾となっている。宣姜のほうは姜姓の夫人ですが、これまた1、2、3と転々としている。そういうふうに一族の中で、再婚三婚することはよくあるわけです。ただし宣公が結ばれた夷姜はほんとに自分を産んだ母親なのか、これでいいのかという質問でありました。その方は非常に深刻に考えていまして、オイディプスのように知らずに結ばれたのならよいけれども、自分の生母を自分の妻にするということがあるのだろうか、ということを質問してこられました。ウーン、そう言われれば、その積極的な証拠はない。そこでまあ細かいことは略しますけども、系図は次の版ではこの太い線のように、宣公が荘公の子供であることは間違いないが生母ははっきりしない、こういうふうに直すと返事をしたところ、岩田さんは非常にホッとしたと書いてこられました。まあホッとされたのは結構ですが、これはホッとするかしないかの話じゃないだろうと、ちょっと蛇足ではありますけども返事に書かせていただきました。

それからもう一つ、図2の晋国の系図は、ややこしいんですけども、この通り、①武公の息子の②献公には女性がいろいろいまして、夫人斉姜が産んだ子供が秦穆夫人（秦の穆公の夫人）、その弟の申生、それから⑦文公、⑤恵公、③奚斉、④卓子とそれぞれ母親が違うわけですけども、こういう系図になっている。献公の継嗣をめぐってゴタゴタがあった末に、結局は⑦の重耳が即位する。これが晋の文公、春秋の五覇の一人で、これは教科書にも載っている。そこに落ち着くまでに、③④⑤⑥とあって⑦となる。その事に関わった話です。

資料1

僖公十年（650B.C.）

5　夏四月、周公忌父と王子党は、斉の隰朋と会合して、晋侯（恵公夷吾）を立てた。

晋侯は、〔奚斉と卓を殺した〕里克を殺して〔諸侯への〕申し開きとした。里克を殺すに際し、公は使者にこう伝えさせた。

「子がいなければ、今日の地位には手が届きませんでした。しかし子は国君を二人、大夫を一人殺しておられる。子の主君たることは、まことに難しいと思う」

里克は、

「〔国君を二人〕廃しておかねば、君も国君になれなかったはず。人に罪を被せるつもりなら、何とでも文辞はつくれましょう。仰せは承わりました」（臣聴命矣）

と答えて、剣に身を伏して自殺した。

このとき〔里克の仲間の〕丕鄭は、〔黄河西岸の五城の〕割譲が遅れている言訳のため、秦に使節として出向いていたので、この難に遭わずにすんだ。

資料2

僖公二十三年（637B.C.）

A　九月に晋の恵公が亡くなり、懐公（圉）が即位すると、「亡命している者（重耳）に随従することは許さぬ。期限を定め、期限までに帰国せぬ者は赦免しない」という指示を出した。狐突の息子の狐毛・狐偃は重耳に随従して秦にいたが、狐突が息子たちを呼びもどさないので、冬、懐公は狐突を逮捕し、「息子たちがもどって来れば免してやろう」と言うと、狐突は

申生というのは太子だったのですけども、献公は寵愛した驪姫、或いは驪姫の娣の産んだ奚斉・卓子の方に肩入れして、それにあとを継がせようとしたところから、御家騒動が起こった。その献公が死んだ後、奚斉が立ち、続いて卓子が立つのですが、これが相次いで殺されるわけです。資料1の僖公一〇年の私の訳文をご覧ください。晋は恵公（夷吾）を秦から迎え入れるわけですけども、その時恵公は、奚斉と卓子を殺した大夫の里克を殺して諸侯への申し開きとした。里克を殺すに際して、公は使者にこう伝えさせた。「あなたがいなければ今日の地位には手が届きませんでした。しかしあなたは国君を二人（奚斉と卓子ですね）、大夫を一人（これは荀息）殺しておられる。あなたの主君となることはまことに難しい」。それに対して里克は、「国君を二人（奚斉と卓子）廃しておかなければ、あなたも国君には迎えられなかったはずでしょう。人に罪をきせるつもりなら、何とでも文辞は作れましょう。仰せは承りました」と言って、剣に身を伏して自殺した。この原文は「臣聴命矣」、訓読すれば「臣、命を聴けり」と完了形に読むのが普通ですが、まあこの「仰せは承りました」ということで自殺するわけです。

同じようなケースは資料2の僖公二三年の場合にもありまして、詳しくは省略いたしますけども、恵公の息子の懐公、先ほどの系図で言いますと⑤恵公の息子の⑥懐公ですが、懐公が立ったときにライバル、自分の叔父に当たる重耳が国外にいて、虎視眈々と帰国を狙っている。それを潰さなくてはならないということで、それに随従している狐毛と狐偃の二人を帰国させろということを父親の狐突に言うわけですね、息子たちが戻ってくれば許してやろうと言う。

答えた。

「息子が仕えるようになれば、父は、これに忠を教えるのが、古来の定めです。名を策に記し、質（礼物）を捧げて〔仕える身となりながら〕二心を抱けば、それは罪というもの。しかるに今、臣の息子たちは、名策を重耳にお預けして以来、長い年月をへております。それを呼びもどせば、二人に二心を教えることになります。父が息子に二心を教えては、国君に仕える資格はございません。刑罰が濫用されぬことは、君の賢明の証にて、臣の心より願うところ。刑罰を濫用して気が済むようになさるなら、誰だとて無罪では済みますまい。仰せは承わりました」（臣聴命矣）

そこで懐公は狐突を殺した。卜偃は病気を口実にして門から出ず、こう言った。

「『周書』に、「君、大明にして、民、服す」（康誥）とある。己れは不明なくせに、人を殺して気晴らしをしては、とても長くはもつまい。民は徳行にお目にかからず、聞こえて来るのは殺戮のことばかり。きっと〔懐公の〕子孫は後が続くまい」→（僖二十四A）

資料3

僖公十一年（562 B.C.）

8・10　九月、諸侯は全軍をあげてふたたび鄭に侵攻した。

鄭の人は良霄と大宰石奐とを楚に派遣し、晋に服従しようと思っている旨を通告した。

孤は社稷〔の危機〕のため、貴君をお慕いできませぬ。貴君が玉帛もて晋を安撫してくだされば、それに対して狐突は、「そんなことはできない。私は重耳に仕えることを息子たちに教訓してきた。二人に二心を教えることは私にはできません。刑罰を濫用して気が済むようになさるなら、誰であっても無罪では済みますまい。仰せは承りました」。臣、命を聴けり、と言って、これは自殺ではなしに、狐突は殺されたという。

要するにこの「臣、命を聴けり」という表現は、自殺する、ないしは殺される直前の言い分というわけです。言ってみれば、一に無念の思いを込める。「あなたからそんなことをおっしゃられる前にそんなことはとっくに分かっておりますよ」。「矣」というのは完了形と見ていいわけですけれども、「そんなことは分かってますよ」。これは君主に向かってそれを言っちゃぁおしまいよ、というやつなんですね。いわば捨て身の発言なんです。「あなたのお言葉承りました。はい」、なんていう素直な話じゃないんです。

もうひとつ、これももう簡単に話します。これは資料3の襄公一一年に、魯の襄公が臧孫紇に命じてこう答えさせた。「我が同盟参加の諸国よ、小国に罪あれば大国これを討つも、いささか嘉すべきことあらば、赦さざることなけん」。これはどうも盟約の言葉のようなので、文語体に訳しました。「との仰せ、寡君は拝承いたしました」という。私はこれを翻訳した時には、なるべく簡潔にしようと、敬語などなるべく少なくしようというつもりで「寡君は拝承いたしました」としたんですが、まあ考えてみると「寡君に（おかれて）は拝承されました」と言う方がいいかなと思う。直せたら直しておいてください。

それは別に致しまして、これは何でこんな事を言うかというと、

武威もて晋をおどしてくだされば、これぞ孤の願うところでございます。

楚の人は二人を拘留した。経文に「行人良霄」とあるのは、〔拘留してはならぬ〕使者であることを示す。

諸侯の軍は鄭城の東門外で閲兵式を挙行した。鄭の人は王子伯駢を派し和議を申し入れさせた。〔九月〕甲戌の日、晋の趙武が入城して、鄭伯（簡公）と盟を交わした。冬十月丁亥の日、鄭の子展が城を出て、晋侯（悼公）と盟を交わした。十二月戊寅の日、蕭魚で〔諸侯が〕会合。〔二日後の〕庚辰の日、鄭の捕虜を解放して、全員に礼をつくして帰国させ、偵察部隊をもどし、掠奪を禁止した。晋侯は羊舌肸（叔向）を派して〔これらの処置を〕諸侯に通告させた。魯の襄公は臧孫紇に命じてこう答えさせた。

「「我が同盟参加の諸国よ、小国に罪あれば大国これを討つも、いささか嘉すべきことあらば、赦さざることなけん」との仰せ、寡君は拝承いたしました」（寡君聴命矣）

鄭の人は、楽師の師悝・師触・師蠲の三人、広車（攻撃車）・軘車（防禦車）十五対（計三十輛）、武装完備の他の兵車もあわせて百輛、それに楽器として歌鐘二列と、それにつり合う数の鎛と磬、女楽十六人を晋侯（悼公）に贈与した。晋侯は〔楽器・楽人の〕半分を魏絳（魏荘子）に下賜し、

「子は、戎狄と和解して中華諸国を整えることを寡人に教えてくれた（襄四A）。以来、八年の間に九度も諸侯を召集し、楽声の諧和するが如き状況となった。子とともにこれを楽しみたい」

と言うと、魏絳は辞退した。〔下略〕

それの前を見れば分かるのですが、諸侯の軍が、鄭城を攻撃して閲兵式をやるんですね。諸侯の軍が一致して攻めた、ところが鄭の側では、当時晋は大国ですから、大国の晋の悼公との間に単独で盟を結んだと思われる。単独とは書いてありませんけども、要するに晋の国君と鄭の国君とが他の諸侯を出し抜いて、袖にした形で、盟を結んだ。そして、どうもその盟と同時に大量の贈り物があったことが分かります。それはその先の方の「鄭の人は楽師の師悝・師触・師蠲の三人、広車（攻撃車）・軘車（防禦車）十五対（計三十輛）、武装完備の他の兵車もあわせて百輛、それに楽器として歌鐘二列と、それにつりあう数の鎛と磬、女楽十六人を晋侯（悼公）に贈与した」。こういうのを「賂」、賄賂の「賂」という字を使うのですが、賂は決して賄賂ではなくて、今でも外交機密費があるようですけども、賂は外交上必要なんです。後世の賄賂というものではなしに、手続き上必須なんですが、この場合はその賂を晋に出したんですね。悼公はその半分を臣下の魏絳（魏荘子）に下賜しようとしたんですが、魏荘子はそれを断る。断った理由はどうもそういう筋の通らないものは私はいらない、その頂き物をする筋じゃないということで断ったようです。

そういうように晋が鄭との間で単独講和をやってしまい、その単独講和した内容を魯に対して通告した。それを、さっきの「我が同盟参加の諸国よ云々、との仰せ、我が君には拝承されました」と臧孫紇が受けたということは、「何言ってやんだい、自分勝手に一方的に盟を結んで、一方的な通告だけで済ますつもりか」、というのが裏の意味ではないか。ただし魯は小国ですから、小国の魯が大国

の晋に対して反発するとしても、これが反発のぎりぎりの線。「わっかりました。そのお言葉を聞くだけは聞きましたよ」、と無念の思いを込めた言葉であるというふうに読むのが、この「寡君、命を聴けり」という表現の裏にあるのではないか。これは「命」とか「辞」という言葉のやりとりで成り立っている一本勝負の外交辞令でございまして、それに国運が懸かっている、そのぎりぎりいっぱいの所の抵抗の言葉になる。

そういうことを、別なところで、五年くらい前に論文にもしたのですけど、この『歴史遊学』という本には、「史料を読む」というオソロシイ副題がついております。こういう読み方でいいかどうかの根拠はありませんけども、そういう史料を読む訓練を史学科四〇年、そのうち十何年かは外様みたいでしたが、そういう状態で読んできたわけでございまして、こういうことの訓練をさせていただいた。第一には史学科の演習の時間で『史記』や『左氏伝』を素材として講読していくうちに、ああでもない、こうでもないと考えるようになったのは、一つの訓練の場でした。第二は卒業論文口述試験の場というのがありまして、卒論或いは修論の口述試験で部屋に入ってこられる方にしてみれば胸が潰れる思いでしょうけれども、一方われわれの方も、きっとこれからも続くと思いますが、史学科教員全員が揃いまして、時には居眠りもしますけども、全員揃って、主査の指導教授と副査と三査が寄って質問をして、その受け答えを傍で拝聴する。これはたしか井上さんが書かれたけども、一種の道場でありました。われわれにとって、今の学界の先端研究はこういうことをやっている、それを先生方がこう指導しておられる、それに対してこういう注文をつけておられる、なるほど、という訳で、聞きながらつくづくこれは道場だと毎年痛切に思っていました。

それからもう一つ、これは蛇足ですけども、学内あるいは院内において、様々な立法・行政上の試練の場というのがありまして、そういうところで、言葉というものの大事さを覚えてきたということがあります。まあそんなことで史学科四〇年と私自身の四〇年は切っても切れない関係にあるということでした。

講義を期待されてきた方、漫談を期待されてきた方、両方を話したんでございますけども、私のしゃべれる限界はここまでです。どうか勘弁してください。どうもありがとうございました。